リーリエを精神的に虐めたい

わさべ。

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いつき見切り発車小説

もしほしぐもちゃんを助けるシーンでカプ・コケコが助けに来なかったら、っていうｉｆルート

タグ君があんまり仕事していないかも

（不定期更新ですので、あまり期待はしないでください）

１０／８完結しました。（リメイクはいつかしたい）

目次

1 …… 1
2 …… 5
3 …… 8
4 …… 13
5 …… 17
6 …… 22
7 …… 27
8 …… 32
9 …… 37
10 …… 43
救済1 …… 47
救済2 …… 55
END ひとりぼっち …… 64

1

今日は私がアローラに引っ越してきてから初めてのお祭り。今日ククイ博士からポケモンをもらう予定だ。

ポケモンをもらうまで時間があったから、カプ・コケコの祭壇を見に行こうと思っていたら

「ほしぐもちゃん!!」

階段を登りきった先に居たのはお嬢様っぽい女の子。

「…どうしたの?」

とても焦っているみたいだったから、声をかけた。

「助けて…ください……ほしぐもちゃんを!!」

女の子が見ている吊り橋の中腹に紫色のちいさなわたがしみたいなポケモンがオニスズメに襲われていた。

ぴゅるると弱々しい声で鳴いている。

「オニスズメさんに襲われて…でも…わたし…トレーナーでは無いから……」

今すぐにでも泣き出してしまいそうな、罪悪感に満ちた表情。動きたくても怖くて動

かないのだろう。
「お願いです!!ほしぐもちゃんを助けてください!!」
「わかった、ちょっと待ってて」
優しく微笑んでほしぐもちゃん?を助けに行く。…この吊り橋、結構脆そうだ。
吊り橋が揺れたことで、オニスズメが私に気が付いて襲いかかってくる。
「ッ!!…ほら、いじめるのは、辞めなよ。痛がっているじゃない、か」
オニスズメのくちばしや爪が肌を切り裂く。少しだけ血が滲んで少し痛い。
吊り橋が揺れる。
「ッ!!もしかしてポケモンを…」
「だいじょう、ぶだから!!」
女の子に声をかけて安心させようと思ったけど、それは逆効果だったみたいだ。声にならない声を発している。
「ほ、ほしぐも、ちゃん…大丈夫…?」
オニスズメの攻撃は止まないが、どうにかほしぐもちゃんの近くにまでたどり着いた。
「ぴゅい!!」
私はほしぐもちゃんを守るため、覆い被さる。

５匹のオニスズメが私を取り囲んで一斉に襲いかかってきた。
「ぐ…や、やめてよ。ほ、ほらッ!!う、…ほしぐもちゃん、が、怖がって…るよ?」
い、痛い。鋭く、尖ってて食い込むような感覚。
吊り橋が強く揺れる。
「けほっ、もう、やめようね?」
説得が通じたのか、諦めたのか、オニスズメ達は飛び去っていった。ほしぐもちゃんを抱えてゆっくり立ち上がる。
「ぴゅい!!」
「うん、大丈夫…みたいだね」
「だ、大丈夫ですか!?」
「ほしぐもちゃんは、大丈夫」
「貴方のことです…ッ!?」
吊り橋が風で揺られる。
「っつぅ…」
強風で吊り橋が揺れて掴まって居ても立っていられないし、傷口が痛む。
「ゴメンほしぐもちゃん、先に行って」
「ぴゅ!!」

わかってくれたのか、女の子の方に向かって飛んで行った。
「ほしぐもちゃんッ!!」
優しく抱きしめている。…助けてよかったかな？
「ごめんなさい、すぐに助けに行きます!!」
「あはは、うん、おねがい」
吊り橋に掴まって歩くのは少しだけ難しく感じる。女の子手伝って貰おうと声をかけた。
その時だった。
吊り橋の縄が片側千切れてしまった。
「――――!!」
女の子が何か叫ぶ。何を言っているか聞き取れない。
周りの景色がゆっくりに見える。どうやらオニスズメ達の攻撃で縄が弱っていたのだろう。
風で傷が痛むはずだけど、何故か痛くない。
「不思議だなぁ」
そんなことを呟いて、私は滝つぼに落ちた。

2

「た、助けてください!!」
俺が守り神の遺跡をミヅキにオススメしたあとすぐにリーリエが広場に飛び込んできた。酷く焦っている。
「ほ、ほしぐもちゃんをッかばって、女の子が!!」
「リーリエ、落ち着いてからでいい。ゆっくり話してくれ」
焦っている状態では、どんな状況か把握出来ない。少しでも落ち着かせて…
「女の子が、たき、つぼに」
「ッ!!ウォーグル!!ミヅキを探してきてくれッ!!」
その言葉を聞いて、ひどく動揺してしまう。ミヅキが滝つぼに落ちる。あの吊り橋から落ちたとなると無事では済まないだろう。
「どうしよう、だれ、か。わ、たしのせい…ごめんなさい、ごめんなさい…」
リーリエを落ち着かせるために背中をさする。下手に言葉をかけるよりはいいだろう。
リーリエの言葉は信じたくはないが、この様子だとミヅキは落ちてしまったのか。

今日はミヅキの歓迎会も兼ねたお祭りなのだ。ハラさんが来た時にミヅキにポケモンを渡す予定だった。その事を事前に知らせた時はとても嬉しそうな顔で楽しみって言ったことは記憶に新しい。

「…」

ウォーグルだけでどうにかなればいいが、不安だ。俺も早く探しに行かなきゃ、ミヅキが危ないかもしれない。

「はっはっは!!まさか、イワンコ同士の喧嘩に巻き込まれるとは」

ハラさんだ。この状況で頼れるのは、ハラさんしかいない!!

「ハラさん!!」

「おお、ククイ!!おや…リーリエ、何かありましたかな?」

「わたし……い…け……ご……さ……」

ハラさんに声をかけられた事に気付く様子がなく、座り込んで震えて何かを呟いているリーリエ。…これは本当に不味いかもしれない。

だけど、本当にハラさんが来てくれて助かった。

しまキングのハラさんにならリーリエの事を頼める。今のリーリエを放ってミヅキを探すわけにはいかない。

「…すみません。リーリエの事頼んでもよろしいですか?」

「…ええ、頼まれました。何があったかは後で聞きましょう」
「ありがとうございます、行ってきます」
ハラさんに了承を得てからすぐにリリィタウンを飛び出して滝つぼの下流に向かう。
全力で向かっている間でも、ミヅキはきっと苦しんでいる。
「間に合ってくれよ…!!」
全速力で下流に向かっている途中でウォーグルが俺を呼んでいる事に気が付いた。
ウォーグルの鳴き声が聞こえる方に向かって走っていく。
河岸を何度も転びそうになりながら走っているとウォーグルの姿が見えた。
「ウォーグル!!見つかった…ッ!!ミヅキ!!」
甘く考えていたのかもしれない。
滝つぼに落ちただけならすぐに助ければ、なんて。
『ほ、ほしぐもちゃんをッかばって、女の子が!!』
リーリエの言った言葉が頭の中で反響する。
「マジかよッ!!クソッ!!」
ウォーグルの傍に傷だらけで血だらけのミヅキが倒れていた。

3

「…大丈夫ですかな？」

「…ありがとう、ございます」

あの子を探しに行ってくれたククイ博士に代わってハラさんがわたしを落ち着かせてくれた。

これ以上ハラさんに迷惑はかけれないから、表に出さないよう押さえつける。…ごめん、なさい。

「…ふむ、ククイからの連絡ですか。……わかりました。」

そう言ってハラさんはケータイを閉じた。…見つかっていて欲しい。

「今ミヅキは応急処置をポケモンセンターで受けているようですな。わたしはミヅキの様子を見に行きますがリーリエはどうされますかな？」

「行きますッ!!」

ここで行かなかったら、あの子に合わせる顔がない。ちゃんと謝らなきゃ…

「そうですか。あまり無茶はしてはいけませんぞ？」

ポケモンセンターに着いた。…いつもより雰囲気が暗く感じて不安になる。
どうか、助かっていますように。と強く願って中に入る。
すると、ククイ博士と女性の方が話していた。
「…リーリエ、大丈夫なのか？」
「はい、ハラさんのお陰です」
ハラさんにやったようにククイ博士にも平然を装う。…本当は、泣き出してしまいたい。けど、今は私よりもミヅキさんの事だ。
「…そうか」
「貴方がリーリエちゃん？」
女性の方が話しかけてきた。
「…はい、リーリエです。貴方は…？」
「…私はミヅキのお母さんです。ククイ博士から話は聞かせてもらいました」
お母さん、という言葉を聞いて体の震えが止まらなくなる。腰が抜けて立てなくなる。
「…ぁ、あああごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいぃ…」
私は何を考えていたのだろう。私にもお母様が居るのに、なぜミヅキさんだけに謝れ

ばいいと思っていたのだろう。
「わ、わたしのせいで…!!わたしのせいで!!あああああああ!!ごめんな、さい…」
　わたしは、どうすればいいの?どうすれば、よかったの?
「あ…」
　抱き寄せられる感覚。ミヅキさんのお母さんが私を抱きしめていた。
「ごめんねぇ…!!こんなにも悩ませちゃって…!!」
「え…?」
　ミヅキさんのお母さんがわたしに、謝ってくる。…わたしが、あやまらなきゃ、いけないのに、
「このままで良いから聴いてもられる?…あのね、うちの子、困ってる人やポケモンを見過ごせないのよ。…誰に似たのだか」
　何かを思い出したのか、困った顔で笑っている。
「うちのニャースはね、ミヅキが連れてきた子なのよ。連れて帰って来た時はびっくりしたわ、だって頭から血を流してたんだもの」
「帰ってきた時、なんて言ったと思う?」
「ニャースが虐められてたから割り込んで守った。って言ったの。ミヅキに叱ったわ。自分をもっと大切にしなさいって、ミヅキが居なくなったらお母さんどうしたらいいの

？って」

「そのあとミヅキは泣きながら謝ったわ。でも謝った後にね私、困ってる人やポケモンを見過ごせない。私は、皆を、助けたい。って言ったの」

「本当に、ミヅキは馬鹿よねぇ…」

泣きながら笑うお母さんを見て、心が暖かくなる。

「…だからね、リーリエちゃんが悩む必要はないの。ミヅキが助けたくて、助けたんだからね？謝るのは無し!!感謝の気持ちを伝えなさい!!…ミヅキが目覚めたら、暫くお説教ね!!」

ミヅキさんのお母さんに励まされて、少しだけ落ち着いた。あったかい。

「ありがとう、ございます」

「うん!!落ち着いたみたいね。…ごめんなさいね、昔話なんて聞かせちゃって」

ミヅキさんのお母さんの服を涙で濡らしてしまった事を謝っていると、ジョーイさんが出てきた。

「ジョーイさん、ミヅキの容態は？」

ハラさんがそう問いかけた。

「もう少し遅ければ、亡くなっていました」

その言葉で背筋が凍る。

「なんとか一命は取り留めましたが、まだ危険な状態です。此処では設備が不十分です」
「滝つぼに落ちたら抜け出せない、という事を聞いたことがあります。その点、今回は運がよかったのでしょう。ですが、出血の量がとても多いです。命を繋ぐギリギリの量しか残っていません」
「ですので、血が必要です。しかし此処の分では血が足りないのです」
「…エーテルパラダイスなら、どうにかなりませんか?」
　ジョーイさんがそう言った時、思わずそう言った。
「えぇ、エーテルパラダイス程の設備ならば、容態は安定するでしょう。ですがどうやって連絡を…」
「わかりました。私が手配します」
　そう私は言ってお母様に電話をかける。
「お母様、救急でヘリを……輸血が必要で……場所はトレーナーズスクールの隣のポケモンセンターです…お願いします」
「…すぐに来れるみたいです!」
　その言葉で皆はホッとした顔をして喜んでくれた。
　どうか、間に合いますように…

4

ミヅキさんがエーテルパラダイスで入院してから3日が経った。
ヘリで迎えが来たそのあと、ミヅキさんの処置は無事におわった。でもまだ目覚める様子はない。
「…眠いです」
ミヅキさんの事を考え過ぎてあまり寝れていない。
ミヅキさんに処置をしてくれたドクターはもしかしたら後遺症が残るかもと言っていたから眠れない。とても不安だ。
ミヅキさんが入院してから毎日、半日ぐらい病室にこもってミヅキさんの様子を見ている。
花瓶の水を変えたり、顔を軽く湿らせたタオルで拭いたりしたりしている。
…包帯を取り替える時に見る傷のあとが痛々しい。
「ミヅキさん…」
ミヅキさんのお母さんに慰めて貰ったとしても、罪悪感は貯まっていく。私がほしぐもちゃんをしっかり抱っこしていれば、私がほしぐもちゃんをすぐ助けに行っていた

ら、なんてたらればを考えてしまう。…でも、後悔しても過去には戻れない。
「ぴゅい?」
　気難しい顔でもしていたのでしょうか?ほしぐもちゃんにも心配されてしまうなんて。只でさえお母様やククイ博士に心配されているのに。
「…大丈夫ですよ、ほしぐもちゃん。だから、私ではなくミヅキさんの事を見ててあげてください」
　そうほしぐもちゃんに伝えると、ミヅキさんのお腹の上で顔を覗きこむように見始めた。
「私は、ミヅキさんに気持ちを伝えることが出来るでしょうか…?」
　でも伝えれなかったら、後悔する。だから…?
「ぴゅい…?」
　ほしぐもちゃんが不思議そうにミヅキさんの顔を見つめている。
「どうしましたほしぐもちゃん?…ミヅキさんに何か…」
　ミヅキさんの顔を見るとミヅキさんと目が合った。
「…おは、よう?」
「ッ!!ミヅキさん!!気がついたのですね!!」
　ナースコールを押してミヅキさんが目覚めたことを知らせる。…本当に、本当によ

かった。このまま目覚めなかったらと思うとゾッとする。
「…私、何があったんだっけ」
まだ意識がハッキリしていないのか滑舌がまわっていないようだ。
「ほしぐもちゃんをかばって、助けてくれて、それで…それ、で」
ミヅキさんが滝つぼに落ちた瞬間がフラッシュバックする。
「っぁ…」
オニスズメ達によって付けられた傷から血を流しながら落ちていく瞬間。
その時、ミヅキさんがお前のせいだ。と言っている気がして。
「わたしの、せい…?ぁ…」
頭が真っ白になって
「ぁぁ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」
何も考えられなくなる
「…ミヅキさん!!お目覚め…!!?お嬢様!?お気を確かに!!」
体を掴まれる感覚がしたけど、ミヅキさん、が…
「わた、しのッ!!ぁぁぁぁ!!わたしのせいで!!」
なん、どもミヅキさんが、滝つぼに落ちていく。恨み言を吐きながら。
おまえがいなければ、おまえがすべてわるいって言いながら。

「いや!!いやぁああああ!!」

5

私は、真っ暗で辺りを見渡しても何も無い空間にいた。
「此処は何処でしょうか…？」
行くあてもなく暫くさまよっていると人が立っていた。
顔がぐちゃぐちゃに塗りつぶされていて誰が立ってるのかわからない。
「えっと、どちら様ですか？」
話しかけてもその人の反応はない。ただ、こっちをじっと見つめているだけ。
でも、この場所にその人しかいないから頼るしかない。
「此処が何処か教えてほしいのですが…？」
「……が……」
ボソボソ声で何かを言っているがよく聞き取れない。
「…ごめんなさい、もう一度お願いし…!?」
肩を強く掴まれる。その人と目が合う。
瞳孔は開ききっていて全身から血が溢れ出ている。その人の身体は死人のように詰めたかった。

「おまえがいなければ」
「い、いや…」
　顔を逸らそうとしても何故かそらすことが出来ない。その人の目から血が流れ出てくる。
「わたしはこんなことにはならなかった」
　首が捻れて千切れる。それでも私をじっと見つめている。
「おまえがぎせいになればわたしはぶじだった」
「おまえのせいだ」
　とてつもなく、恐ろしい笑い方をした。笑う度にその人は傷ついていく。だんだん原型をとどめなくなる。
「や、やめて」
「にくい」
　足がありえない方向に曲がり、腕が千切れる。
「あ、ぁ」
　頭を抱え込んで見ないように、聞かないようにしても視界に入り声が聞こえる。
「しねばいいのに」
　目玉が落ちる。からっぽの目なのにはっきりと捉えられている感触がする。

「しね」
「あ、あははは!!はははは!!」
「しねしねしねしねしねしねしねしねしねしねしね」
憎悪がこもった罵声が絶え間なく聞こえてくる。
だれか、助けてよ。楽にしてよ。

おねがい、ころして。

「ミヅキちゃん落ち着いて、ゆっくりいいからね」
「…っくぅ」
あの日病室で目覚めてから1週間が経った。
私が目覚めてすぐに精密検査が行われた。簡単な質疑応答や運動出来るかどうかの確認だ。
記憶とか読み書きは問題なし。いつも通りだった。
でも問題は運動能力の方だった。どうやら落下の衝撃で下半身不随になってしまっ

た。
　力を入れているはずなのにピクリとも動いてくれなかった。曲げれたと思っていたのに曲がっていなかった時の辛さは多分、忘れることが出来ないだろう。
　リハビリをすれば多少は回復すると言われ、空いた時間があったらリハビリをしている。1人で出来ないのが辛い。
　感覚が全くないのに時々酷く痛むことがあって、リハビリもままならない時がよくある。
「その調子です。ゆっくり確実に」
「っ…はい」
　オニスズメに付けられた傷は跡として残ったけど、ほしぐもちゃんを守れた証として残るからこれはこれでいいと思っている。
　お母さんには叱られた。当たり前。どれだけ心配していたかを涙ながらに話してくれた。
　その時にリーリエの話を聞いた。
　要約すると私が滝つぼに落ちたのを見てトラウマになってしまったらしい。
　リーリエがお母さんに慰められた時は大丈夫だったみたいだけど私が状況確認したせいでフラッシュバックしてしまったらしい。

目が覚めた時はまだ意識がボーっとしていたから何が何だかわからなかったけど、今思い返すと聞かなければよかったという後悔が付き纏う。
「じゃあちょっと休憩しましょうか。丁度15分経ちましたから」
「わ、わかりました」
無理はしないでね、と私の担当の看護士さんが釘を刺してくる。…言わなくてもどちらにしろ1人では動けないからなぁ…
「…リーリエ」
今、リーリエは何も無い部屋に隔離されているらしい。
目が覚めると身の回りのもので自傷をしてしまい、目を離すと何をしてしまうか分からないかららしい。24時間監視体制だ。…そんなの、牢獄と一緒だ。
でも、見張っていないとひどかった時だとエーテルパラダイスから飛び降りて自殺しようとしていたらしい。
それを聞いて私は、悲しくなったけどリーリエに会いに行きたいと思った。
根拠はないけど、私ならリーリエのトラウマを抑えられる。…そんな気がした。
お母さん曰く、抱き締めたら落ち着いてくれたらしいから私もリーリエを抱き締めるつもりだ。
…リハビリがおわったら看護士さんに相談してみよう。

6

看護士さんにリーリエの事を相談してから数日。リーリエが隔離されている部屋の前まで来ていた。

どうやら看護士さんがルザミーネさんに話を通してくれたらしくリーリエの現状について更に詳しく知ることが出来た。

私がまだ目覚めたばかりの頃にも会いに来てくれていたけど気を使って簡潔に教えてくれていたらしい。

ルザミーネさんの話によるとかなり危険な状態らしい。目が覚めると暴れだして手を付けられない。落ち着いたかと思ったら突然笑い出す。などと情緒不安定な時が増えてきたそうだ。

ひどい時だと殺して、なんて事を言ったらしい。

その時の様にどうにもならない時は麻酔を使って鎮めているそうだ。それを伝えてくれた時のルザミーネさんの顔を思い出すと胸が締め付けられる。

そんな状態だからまともにご飯も食べておらず今は点滴で栄養を補っているらしいがそれも時間の問題だ。すぐにでも衰弱してしまうだろう。

「ミヅキ、準備はいいわね？…正直、貴方に対して何をしてしまうのかわからないわ」
「…はい、私じゃないと止められない。…そのままにしていたらきっと、リーリエは荒んでいくと思います。ルザミーネさんも気付いてますよね。…だから」
「…わかったわ。貴方にリーリエをお願いします」
私の思いが伝わったのか私に託してくれた。
扉のパスワードを解除してもう一度ルザミーネさんが不安そうに聞いてきた。
「…貴方1人で入れるのは不安だけれど、本当に1人で相手をするのね？」
ルザミーネさんの目を見て頷く。
「わかったわ。…気を付けて」
ルザミーネさんに見送られてリーリエが居る部屋に入った。

「ぁあぁぁ…」
リーリエは部屋の隅に頭を抱えて何かを呟いていた。自分で傷付けたのか体には傷跡が残っている。
「…」
部屋の様子を見ると本当に何も無い部屋だった。ただ、ベットがあるだけだ。リーリエが傷つけれるような物は一切ない。

少しだけ声をかけるのを戸惑ってしまった。ここまで追い詰められているとは思ってもいなかった。
「リーリエ」
「…!!ミヅキ…さん、ぁし、が……ぁ、ごめんなさい……」
力無く、壁に背を付けて拒絶を示す。
だいぶ弱っている。目の焦点が合っておらず、くまが酷い。
「リーリエ、ありがとう。リーリエのお陰で私、生きてる」
「…え?」
リーリエが目を合わせてくれた。ずっと泣いていたのか目が充血している。
車椅子でゆっくり近づく。
「リーリエが居なかったら私、多分死んでた。リーリエが此処に連れて来てくれたから私は助かった」
「でもッ!!わ、私が居なかったらッ!!居なければッ!!…ミヅキさんはこんな目に、会わなくてよかったのに…」
私の状態を見て、泣き崩れてしまう。そして、自分を責めるような言い方をした。
「…私が助けたくて助けたの。だからリーリエは悪くない」
「…で、も」

…リーリエの私に対しての罪悪感が薄れてくれない。なら正直に言いたい事を言えば伝わるだろうか。

「…リーリエは私を助けたくて此処に連れて来たんだよね?…それなのに私が怪我をしなかったら…なんて言ったらさ、逆に助けなかった方が良かったのかなってなる」

「ッ!!」

「だから、さ…お願い、だから……自分を責めないで…」

涙が溢れてくる。心がいっぱいいっぱいだ。

「わたしは、リーリエのこと、うらんでないから」

「み、ミヅキさん…」

リーリエ私の方に近づいて来た。涙を沢山流しながら。

「…リーリエを、想っている人は沢山居るから。…もっと体を、大事にしよ?」

力強く抱きしめる。それに応じてリーリエも強く抱きしめてくる。

「あああああああ……ミヅキさんッ!!ミヅキさんッ!!」

リーリエの優しく背中を擦ってあげると私の方にもたれかってくる。

「疲れたね、リーリエ。私は居なくならないから、安心して」

声をかけても反応はなかった。どうやら眠ってしまったようだ。顔を見ると柔らかい表情で眠っている。

「おやすみ、リーリエ」

「じぇるるっぷ」

7

「着きましたね、ミヅキさん」
「意外と近かったね。アーカラ島」
今、エーテル財団のフェリーでコニコシティに訪れていた。とある目的があって。
リーリエに車椅子を押してもらって上陸する。…何故リーリエが押しているのかと言うと、どうやら私への罪滅ぼしみたいだ。アーカラ島に来る前にも着替えを手伝ってくれた。
あの日、慰めたけどまだ罪悪感が残っているみたいで心配だ。エーテルパラダイスに帰ったらお礼、言わなきゃ。
コニコシティの中に入ると定食屋から美味しそうな匂いが漂ってくる。
「…いい匂い。お腹空いた」
「おいおい、さっき朝ごはんを食べただろ?」
「そうですよ、ミヅキさん。ご飯を食べに来た訳ではないんですよ」
ムッとした顔で訴えたけど、流されてしまった。
「ほらミヅキ、今回の目的は命の遺跡だろ?全部済ませてから食べに行こうぜ?」

「やった」
「よし……ん？上手いように乗せられたか？」
　ククイ博士の言質は取ったから、ササッと行って食べに戻ってこよう。
「えっと、カプ・テテフさんに会って足を治してもらえるか頼んでみる。という事で良いんですよね…？」
　リーリエは不安そうにククイ博士に訪ねた。
「ああ、そうだが…どうかしたか？」
「ええっと、本当にカプ・テテフさんは治してくれるのでしょうか？」
「…私もそう思う。アローラに来てからまだ日が浅いしまず出会えるか、って問題もある」
　アーカラ島に来る前にカプ・テテフの事を調べたら無邪気で残酷な守り神、と書いてあった。残酷って所に恐怖を感じる。
「正直、カプ・テテフに会えるかは俺にも分からない。だが、試さないで諦めるのは嫌だな」
　ミヅキもそう思うだろ？と言われ、思わず頷く。でも怖い。
「大丈夫だ。カプ・テテフもわかってくれるさ。じゃあ、命の遺跡に向かおうか。早く終わらせてあそこの定食屋に行こうぜ!!」

「よし、行こう」
美味しいご飯が待っているんだ…!!

「…おいおい、なんだよこの荒れ具合」
「…酷い、誰がこんな事を…」
遠目から見てもすぐにわかるほど命の遺跡の周辺は荒れ果てていた。
草木は折れていて、辺りに残骸が散らばっていた。本当なら整備されており綺麗な場所だったはずだ。
「…?」
どこからか鳴き声が聞こえる。
「…あっち?」
遺跡の奥の方から微かに聞こえてくる。
「リーリエ、博士。遺跡から何か聞こえる。もしかしたらこの原因を作ったのが居るかも」
「…確かに、聞こえるな。…リーリエとミヅキは待っていてくれ。俺が様子を見てくる」
「…博士、気を付けて」

「あぁ、わかった」
　ククイ博士の背中を見ているとリーリエが手を繋いできた。
「私、不安です。またあの時みたいにならないか」
「…博士なら大丈夫だよ」
　優しく握り返すと柔らかく笑ってミヅキさんに助けられてばっかりですね、と言った。…私も結構助けられてるよ、リーリエ。

　その言葉を伝えようとした、その時だった

「テーーーッ!!」
　カプ・テテフが飛ばされてきて岩に激突した。
「ッ!?カプ・テテフ…?どうして…?」
「か、かひゅ……っ」
　カプ・テテフは傷だらけで顔色がとても悪い状態だ。
「毒状態…!?大丈夫ですか!?」
「ッ!!テ、テテッ!!テテーーー!!」
　リーリエがカプ・テテフに近付くとそれに気が付いたカプ・テテフが必死な形相で私

達に何かを叫んだ。
「ッ!!リーリエ!!ミヅキ!!危ない!!」
その声が聞こえたと同時にカプ・テテフがいた所に衝撃が走って砂埃が舞い上がる。
「きゃあああああ!!」
「ッ……!!」
「て…か、かひゅっ……け……」
砂埃が収まるとそこにはぐったりしているカプ・テテフと
「あ、ぁぁ」
得体の知れない不定形な白いモノがカプ・テテフを掴んで浮かんでいた。
「じぇるるっぷ」

8

「ベーの」
「か……くぇ……」
異質なオーラを放ちながらソレはカプ・テテフを締め上げる。暫く苦しそうにもがいていたけどカプ・テテフはだらりとしてソレに投げ飛ばされてしまいました。
あれは、ポケモンなのでしょうか？
「ウォーグル!!ブレイブバードだッ!!」
「ふぉう!!」
ブレイブバードがソレに直撃した。でも効果が薄いみたいでソレは気にもしていない。
「…リーリエ!!ミヅキ連れてコニコシティにいるしまクイーンを呼んできてくれ!!」
「で、でも」
ククイ博士のウォーグルではとても太刀打ち出来そうにもない。…ここで行ってしまったら、ククイ博士が……
「リーリエ、行こう」

「ミヅキさん…？」
「私達に出来ることは、助けを呼ぶ事しか出来ないから。此処に残ったらかえって危険」
ミヅキさんにはお見通し、ですね。…でもミヅキさんが小さな声で私が居なければ、なんて言った声が聞こえてしまった。
…ミヅキさんも悩んでいるのですね……
「わかりましたミヅキさん、行きましょう!!」
でも今、考え事をするべき時じゃない。
ミヅキさんの車椅子を押して全速力でこの場所から離れなきゃ、私がミヅキさんを守らなきゃ!!
「リーリエ!!頼んだぞ!!…ウォーグル!!おんがえしだ!!」
囮になってくれているククイ博士とウォーグルに感謝をしてその場所から離れる。
コニコシティはまだ先だ。
「ミヅキ、さん!!大丈夫、ですか!?」
「…ごめん、リーリエ」
それ以上は何も言わなかったミヅキさん。…きっと足の事だろう。…あれは私が悪いのに、ミヅキさんに非はないのに。
「はぁ…はぁ…」

全力で走って息が切れる。運動をしておけばと後悔してもスタミナが回復する訳では無い。…コニコシティはまだ遠い。まだメモリアルヒルに着いてもいない。
「リーリエ!!来た!!」
ミヅキさんが叫ぶと同時に私のすぐ横を通り過ぎて行ったソレの技。もしあれが当たっていたらと思うと冷や汗が出る。
「はぁっ…!!はぁっ…!!」
後ろを振り返る余裕も足を止めて回復する余裕もない。胸が焼けるように熱くて足がふらつく。
ククイ博士とウォーグルが心配だけど、今は逃げるしかない。
「…リーリエ。私を置いて逃げて」
「ッ!!ダメ……ですッ!!」
「私はッ!!ミヅキさんを…守りたいんです!!……自己犠牲は、やめて…ください…」
今でもミヅキさんがほしぐもちゃんをかばって落ちていった瞬間が時々フラッシュバックする。…もうあの時の光景は見たくない。だから、絶対に守るって決めた。
「…リーリエ」
「だから……一緒に……」
思いを伝えようとしたその時だった。

「リーリエッ!!伏せて!!」
ミヅキさんに言われて反射で伏せると私の上をソレが突っ込んできた。ソレは私達の前に立ち塞がって様子を見ていた。
…生き物ではなく無機物みたいで何を考えているのか分からない。
落ち着いて深呼吸をして少しでも体力を回復させる。
「…ミヅキさん、私が何とかしてみます。だから、逃げれるだけ逃げてください」
「…ダメ、リーリエ」
でも、立ち止まっていたらコニコシティには辿り着けない。…今度は私が…!!
「…じぇる」
ソレが反応を示すその先にはさっきやられてしまったはずのカプ・テテフが飛んでいた。
「……て」
ソレにやられたはずの傷は七割ほど回復していた。…それでもまだふらつきが残っている。
「カプ・テテフ…!?」
「…何故カプ・テテフさんが…?」
「てー、ててー!!」

カプ・テテフさんは私達方を向いて早く行けと伝えてくれた気がした。
「ミヅキさん、行きましょう」
「…うん」
カプ・テテフさんが食い止めてくれている今のうちに、コニコシティに向かって、助けを呼んで…
…誰に助けを求めれば良いのでしょう?
…カプ・テテフさんが負けてしまう程の相手に太刀打ち出来る人はいるのでしょうか…
例えしまクイーンでも、アレを倒せるとは思えない。カプ・テテフさんと協力しても、もしかしたら…
そんな不安を抱えても、私には何も出来ない。だから、今は私にできることを、ミヅキさんを…
コニコシティはまだ遠い。

9

「……」

あぁ、リーリエに迷惑をかけてしまっている。足でまといだ。

「はぁっ…はぁっ…」

私の車椅子を押して走っているからか、足元がふらついて息があがっている。

私は何もせずただ、座っているだけ。リーリエに命を預けて。

体力は限界を超えているはずなのにスピードが衰えない。私が、居るから…

…リーリエにたくさん背負わせてしまっている事に嫌悪感を抱く。

この怪我は私が引き起こした事だ。私が助けたいと思ったからほしぐもを助けた。その過程でたまたま橋が落ちてしまっただけだ。

でも私を置いて逃げてと伝えた時、察してしまった。リーリエは私を絶対に見捨てることはない。

更にそのあとのリーリエの私が何とかする、と言う言葉。多分私が、私という存在が、リーリエの鎖になっている。…なってしまっている。

あぁ、私なんか居なければ。リーリエはこんな目に合わなくて済んだだろう。

ごめん、リーリエ。

心でしか呟けない今の状況。口にしていたらきっと、走りながらでも返答していただろう。でもそれは、更に負担を増やしてしまう。

だから、耐えるしかない。リーリエが必死になって逃げているのを私は、ただ座って…

どうか私を置いて逃げてはくれないか、そうしてくれれば楽なのに。私も、リーリエも。

「ッ…!!はぁっ…!!はぁっ…!!」

リーリエの足が止まる。足場が悪いのに車椅子を押しながら走り続けていたからだろう。

ここでも声はかけられない。息を整えて、また私を連れてコニコシティに向かうから。私が出来ることは、ない。

私は、どうすればいい？

「…ッ!?もう…カプ・テテフさんが……倒されて……」
その言葉で振り向くと、ソレが迫ってきていた。そんな簡単に倒されるなんて、まさか。
「…ミヅキさん掴まっててください」
そう言ったリーリエの顔は青かった。守り神ですら抵抗できないソレの強さ。きっとリーリエはコニコシティで助けを求めれる人が居るのか不安なのだろう。
…コニコシティ、ましてやアローラでソレを倒せるトレーナーはいないだろう。
無機質で意図が読めない、ポケモンとは違う。敵意をもって襲い容赦なく潰す。

まさに怪物。

…私達が逃げようとして逃げれる相手ではなかった。
「きゃあああ!?」
「…ぁ」
ソレから放たれたであろうナニカが車椅子に着弾する。その衝撃で吹き飛ばされる。
「くぁ……ッ……」
地面に投げ飛ばされて岩にぶつかる。

オニスズメのくちばしとは比べ物にならない痛みが全身を走る。あぁ、頭が回らない。何か暖かいものが私を流れているような気がした。

し、にたくない。いや、だ。

どうにかして起き上がらなきゃ…？

「……めたぁ」

ソレが目の前で嬉しそうに私を見ていた。

「ひぃ…」

「ミヅキ、さん!!」

リーリエがソレの前に立ちはだかった。リーリエも傷だらけだ。

「…ミヅキさんに、手出しはさせ、ぇぎ……」

邪魔だ。とソレは軽く腕を振るようにリーリエの溝落ちを殴った。

「ぶ、おぇ…」

リーリエはその場で蹲って血の混じった胃液を吐き出した。

「じぇるるっぷ」

空に穴が空く。全てを飲み込めるような不気味な穴。

「い、や」
ソレの狙いはわたしだ。
ソレは私に覆い被さるつもりだ。
「やめ、て……」
こわい、わたしは、なにをされるの？
必死に逃げようとしても地べたを這いずるだけで満足に動けない。抵抗してもソレは何も感じていないみたいだった。
「いや、いやいやいやぁ!!」
つつまれる
いやだ!!わたしはまだ
「う〝あ〝」
「ミヅキ、さん、…ぁ」
「あああ、あああああ、あ……？」
「お……えへ、えへへへ、えへへへへ／／／」

「ミヅキ…さん？」

「あ、あ、あ、あ、あ、あっ、お゛っ」

「イぐっ、えへっ、あ、ああ、あはははははは!!!!」

「ミヅキさん!!しっかりしてください!!ミヅキさん!!」

じぇるるっぷ

10

「私が、ミヅキさんを助けなきゃ」
早く、準備をしなきゃ。こうして考えている間にもミヅキさんは苦しんでいるから。
ああミヅキさん。私が必ず。
――私が居なければ。ミヅキさんが怪我をせずに済んだ。ミヅキさんとあわずに済んだ。
私が絶対に助け出します。
――嫌だ。また私のせいで。ミヅキさんが。私がやったんだ。
…うるさい。
――怖い。罰。積められる。批判。苦しい。罪。生まれたくなかった。
うるさい。
――ああもう嫌だ。誰か、私を殺して…
「うるさいうるさいうるさいッ!!」
「…ッ!?リ、ーリエ?」
「ッぁあ、お、お母様?…ご、ごめんなさい。いらしてたのですね」

気づかなかった。何時からいらしていたのだろう。お母様にみっともない所を見せてしまいました。とにかく、今考えるべきことは

――何故私を産んだのです？お母様。

…違う。ミヅキさんのこと。お母様なら何かわかるかも知れない。何か方法があるのかもしれない。

「…お母様、私、ミヅキさんを助けに行きたいです」

「…ダメよ。危険すぎるわ」

――今更母親面。私の気持ちなんてわかりなんてしない癖に。

苦痛で歪んだ顔をしながら断ったお母様。ここで折れたら、ミヅキさんはもう帰ってこない。そんな気がした。

「お願いです。助けに行かせてください!!お母様!!…私が呼びかけた時、少しだけ反応してくれた気がしたのです!!」

「……」

「今、こうしている間にもミヅキさんは苦しんでいるのです!!お願いします、お母様!!」

――こんなに不幸になるなら生まれたくなかった。お母様。

「…わかったわ。ザオボー!!アレを!!」

私の決死の交渉で、どうにかお母様を動かすことが出来た。

「ありがとうございます、お母様」
「…ここでダメ、って行っても助けに行くでしょう?…それなら、より安全に準備満タンで助けに行った方が安全と思ったのよ」
…お母様にはお見通しだ。考えてること、全部。
――――なら私を産まないで欲しかった。
照れくさくて、にやけてしまう。
「お待たせしました。此方がウルトラホール転送装置でございます。最近開かれたウルトラホールの繋がっている先にワープができる装置です。まだプロトタイプでございますので、おひとりでしか…」
「大丈夫です。私1人で行きます」
「…送り出す、って言っちゃったもの。全力でサポートするわ」
「…お母様。…ありがとうございます」
心強い。お母様とザオボーが手伝ってくれるなんて。
――――ああ、私を楽にしてほしい。
「リーリエお嬢様、これを」
そう言って拳銃のようなものを手渡された。ボディは白で統一されて、パーツ部分は灰色。エーテルパラダイスのロゴが入っている。

「これは護身用です。万が一の時にウルトラビーストに向かって撃ってください。一発で倒れるはずです。一体に2発以上打つ必要はありません」
「ありがとうございます、ザオボー!!」
「この鞄の中に必要そうなもの入ってるから、一応持って行きなさい」
「はい!!」
思わず微笑んでしまう。
こんなにも心配されて、私は幸せだ。
――――幸せなんて、ない。
「転送の準備できました」
機械にエネルギーがたまっている。青いオーラのようなものを纏っているみたいだ。
「行ってきます。必ず連れて帰ってきます!!」
「無理はしないように、リーリエ」
青い光に包まれる。周りがだんだん静かになっていく。
「ミヅキさん、今助けます!!」
きっとすぐにミヅキさんを見つけれる、そう信じて。

救済1

青いオーラに包まれて数秒後、目を開けるとアローラではなかった。どうやら成功したようだ。

手で握っている護身用の拳銃を見る。私には似合わない、異質な道具。でも今はそれがとても心強く感じた。

胸に手を当てて大きく深呼吸をする。

私にしか、出来ない。ミヅキさんを助けることは!!

決意を胸に秘める。ミヅキさんに恩を返したい!!

「…私になら出来る」

改めて辺りを見渡す。

「ここにミヅキさんが…?」

ついた場所は洞窟の奥底の開けた場所。灯りがなくても隅々まで見渡せるほど明るい場所。水晶のようなものが沢山飛び出してきていた。

アローラで見たことのない光景。そんな、不思議な空間。心做しか身体が軽く感じる。本当に別の世界みたいだ。

周りには生き物の気配はなく、時々水晶が崩れる音が聞こえるだけ…？

「……？」

耳をすませると奥の方から声のようなナニかが聞こえてくる。遠すぎて何を言っているかはわからない。

「…行ってみる価値はありそうです」

価値がある、と言うよりはそれに賭けるのが正しいのかもしれない。情報は無いに等しい。

周囲を警戒しながら音のする方へ向かう。足元は不安定で下を見ながら歩かないと転んでしまいそうだ。

周囲を注意しながら前へ進む。

近付くにつれて声と何かが落ちるような不快な音が聞こえてくる。

「はぁ、はぁ……」

その先に、音の本体が居る。べちょり、べちょり、と何かが生み落とされるような音。その本体。

――怖い。

私は覗くことに躊躇していた。ここで立ち止まる暇は無いはずなのに。

そう思っていた時だった。向こうから姿を現したのは。

「……ひっ」

そこに居たのは紛れもなく、ミヅキさんだった。そう、ミヅキさんで『あってしまった』。取り憑かれた時と比べるとアレの色と髪の色が黒色に染まっていた。ミヅキさんの目の色は赤く、虚空を見つめていた。

「ぐ、ぎぃ、あ…ぁあ……」

突然、ミヅキさんは苦しみ出す。人から出ないような声をしていた。胸元が突然膨らみだし、それに比例するようにミヅキさんは苦しむ。

悶え続けること数秒

「お、ぉおぉぉぅぇ…」

びしゃり、と言う音と共にソレが吐き出されていた。

「あ、あぁああ」

恐怖のあまり、腰が抜ける。

ミヅキさん口から出てきたのはソレ。寄生した人間を宿主として、産み出させている。そう理解してしまった。せざるを得なかった。

ミヅキさんが口からソレを産み出す所を見てしまった。

――――嫌だ、アレに寄生されるなんて。

「ッハァ…!!ハァ…!!」

ゆっくりと後ずさる。バレないように、そこには元から誰も居なかったように。
でも、そう甘くはなかった。手に持っていた拳銃が岩で音を鳴らしてしまった。
「……あァ」
「ひぃ…!!」
ミヅキさんと目が合う。ミヅキさんと思えないほど無機質で何も写さない目。…ソレがこちらをじっと見つめていると思ってしまう。
突然、ミヅキさんは歪な笑みを浮かべた。
じぇるるっぷ
「エへ。りぃリエ、みィつけたぁ」

――――逃げなきゃ。私だけでも助からなきゃ。
後ろを振り向いて走り出そうとした。でも身体は動かなかった。
「えへ、うふふひひひぃ、あはははははは!!!」
前を見上げるとそこにはミヅキさんが居た。けたたましく、狂ったように笑うミヅキさんが。
「っぁ…」
何故逃げようとしていたのでしょう、私。私のせいで色々な迷惑をかけて、ソレを懺

悔するために私はミヅキさんを助けに来た!!
今、ミヅキさんに近づけている。…ミヅキさん引きはがすチャンス…?
「りぃリエぇ、とってもキモちィい、の」
「…ミヅキさん?」
突然足を捕まれ宙ずりにされる。目の前にはミヅキさん
顔。目元は酷いくまが出来ていてよだれは流れっぱなしだった。
「あ、あ、あ、あ、あ…／／／」
「ミヅキさん!!ミヅキさん!!しっかりしてくださいッ!!」
突然、痙攣し始めた。ミヅキさんの焦点はめまぐるしく変わり、息が荒くなっている。何か液体が滴るような音もした。
名前を呼ぶ度に反応が強くなっている。もしかしたら…!!
「ミヅキさんミヅキさんミヅキさん!!ごめんなさいッ!!私が、あの吊り橋で私が助けに行ってたらミヅキさんがこんな事にならなくて良かったはずですッ!!」
「私は、ミヅキさんに尽くします!!ミヅキさんの為なら何でもしますッ!!家族の皆さんや、ククイ博士も私も!!ミヅキさんの帰りを待っています!!」
「ミヅキさんッ!!一緒に、帰りましょう!!」
しばらくすると痙攣が治まってミヅキさんはだらりと力を抜いた。私の足を掴んで

いる触手の力も弱まった。
　ミヅキさんに、伝わった…？私の想い…？
「…ミヅキさん？…!!もしかして、わかって」

「ダからイッしょ二」

更に顔が近付く。瞳孔は開ききっていた。私を飲み込みそうな深い闇のようだった。

「わたシとズッときもチィィこと」

触手がこちらに伸びる。

「ずうっトズうッと」

ソレが近付いてくる。ミヅキさんをさらった時のように。無機質で何も感情がないミヅキさんが。

――怖い、怖い怖い。

「…ぁああ」

ぎゅっと拳銃を握る。

――嫌だ。ミヅキさんみたいになりたくない。

「来ないで来ないで来ないで来ないで…」

『これは護身用です。万が一の時にウルトラビーストに向かって撃ってください。一発で倒れるはずです。一体に２発以上打つ必要はありません』

――――いや、いやいやいやいやいや!!

「あ、あああ、ああああああああ!!」

何度も引き金を引く。引く度に光線がミヅキさんに撃ち込まれていった。

救済2

「……っ」

半日経っても戻ってこないリーリエ。不安と焦りでどうにかなってしまいそう。

「ザオボー!!わたくしも送ってちょうだい!!」

「いけません代表。貴方が行ってしまわれたらこの装置の繋がりが途絶えてしまいます。どうか落ち着いて下さい」

「ですが…!!」

落ち着けるはずがないこの状況、そんな時に装置が作動し始めた。

「ッ!!代表、リーリエお嬢様がお戻りになられたようです!!」

「リーリエなのね!?」

反射で思わず聞き返した。…仮にウルトラビーストだった場合、すぐに対応しなければ。

「えぇ、大丈夫です。この装置は送り出した者、つまりリーリエお嬢様しか入ることは出来ません。ウルトラビーストが来ることは無いでしょう」

「よかった…!!」

本当に、よかった。モーンに続いてリーリエまで失ったら……

「リーリエ!!」

装置が煙を出して作動を停止した。煙が晴れるとリーリエが立っていた。

「リーリエ!!よかった、よかった!!無事に戻ってきてくれて…!!」

「……」

「リーリエ?」

様子がおかしい。顔は俯いたまま、わたくしの方を見てはくれない。…心配になって顔を覗き込む。

「リーリエ、貴方頭から血が出てるじゃない!?…すぐに治療を…」

「…おかあさま、おねがいがあります」

リーリエがわたくしの事を見る。怪我以外をよく見てみると目が虚ろで輝きがなかった。

「何、リーリエ?わたくしたちに出来ることなら何でもするわ」

でも、お願い事を叶えてあげたい。リーリエは頑張った。ミヅキを助ける為に…?

ミヅキを助けたなら、ミヅキは何処に……?

「おかあさま、わたしを、ころしてください。おねがいします」

「わたし、もういやです。たすけるはずだったのに」

「ぁ、あぁぁぁああ…しにたい、です。ころしてくださいぃぃぃ…」

「もう、いやです…いきているのが、つらいです」

「ごめんなさい…」

「たすぇ、て…」

「ゆるして…」

「…っ」

リーリエの悲痛な願い。頭を抱え、ふるえながらゆっくりとわたくしに告げた。掠れた声でどれだけ叫んでいたのかが用意に想像出来てしまった。

…そして、ミヅキがいない。助けられなかった。

ああ、ミヅキのお母様になんて伝えればいいの…？

「…リーリエ、疲れたでしょう？…今日はもう休みましょう。リーリエはとても良く頑張ったわ」

リーリエを抱き締めて優しく撫でる。リーリエの震えが止まらない。

「…はい」

力無く返事をしてわたくしの手を握った。冷え切った手だった。

「代表、大変ですっ!!お嬢様がっ!!」

その夜、わたくしが眠っていると職員の方が飛び込んできた。酷く焦っている様子でマトモに話が聞ける状態ではない。

「わかったわ、すぐに向かいましょう」

リーリエが帰ってきてからすぐにメディカルチェックを受けさせた。今は病室にいるはずだ。

「うあああああああああああああ!!」
「ダメですっ!!お嬢様っ!!やめて下さい!!」
「いやあああああああ!!」
「リーリエ…?」
病室に入るとリーリエが壁に頭を打ちつけようとしていた。
髪の毛を掻きむしり、引きちぎったような跡が残っていてリーリエの足元には髪の毛が散らばっていた。
壁には赤色の跡があり、リーリエ頭を打ち付けていた事が分かってしまった。
「わ、わたしがみづきさんを、ころした?」
「な、んで?」
「わたしなんかがたすかるより、みづきさんが、たすかるべきだったのに」
「その、みづきさんを」

「っぁ、あぁぁ」

あぁ、こんなリーリエ、見ていられない。はやくいつものリーリエに戻って……

「ッ!!リーリエッ!!」

リーリエがわたくしの方を向く。

「おかあさま」

「どうしたの、リーリエ」

しっかり目を見つめて言葉を待つ。

「なんで、ころしてくれなかったのですか」

「こんなにも、くるしいのに、しにたいのに」

虚ろな目でわたくしを見つめる。

「そ、れは」

平常心を保って言葉を出そうとした。

リーリエが大切だからよ。
その言葉が出なかった。

「なんで、わたしをうんだのですか」

息が詰まる。鼓動が早くなり、息苦しくなる。

「こんなにつらいのに」

「わたしなんて、うまれるかちなんてないのに」

「うまれたく、なかった」

「…わかったわ、リーリエ。貴方のわがまま、聞いてあげる」
「代表!?」

「おかあさま、ありがとう」

「おやすみ、リーリエ」

「だいすき、です。おかあさま…」

抱き締めて暫く背中を軽く叩いていると寝息が聞こえてきた。さっきまであんなにも暴れていたのに、やっぱり疲れてたのだろう。

眠っているのを確認して、ベットに優しく寝かせた。

「…代表、本気ですか?」

「嘘に決まってるわ、リーリエを殺せるわけないじゃない!!」

「…では、どうするおつもりですか」

「記憶を消すの。ミヅキに会った記憶から、今日のことまで全てを」

ＥＮＤ　ひとりぼっち

あの後の事を思い出す。リーリエを抱き締めて、そのまま記憶消去の処置へ。目覚める前に、記憶を消してあげたかったからだ。

…母親、失格ね。

そしてミヅキの事だ。生きていた。ウルトラビーストとして。

…気がついたのはリーリエの記憶消去した後だった。……もっと早く気付く事が出来たなら……

ミヅキの理性は残っていて半分人間、半分ウルトラビーストの身体になっていた。

ミヅキに詳しい話を聞くことが出来た。

リーリエの持っていた鞄の中に入っていたウルトラボールに入って戻ってきた、ということを聞いた

…ウツロイドに寄生されて、すごく気持ちよかった、全てをウツロイドに任せたら、息をするだけでも気が狂いそうだった、と。

今は大丈夫みたいだったが、今はエーテルパラダイスの地下で経過観察と治療を出来ないか研究中だ。

もう少し遅かったら、ミヅキが完全にウツロイドに洗脳されていたかもしれない。

…リーリエに合わせてみる事も考えてはいるが、会わせることは無いだろう。

「リーリエ、おはよう」

リーリエの部屋に入り優しく声をかける。

「……？」

「今日は何をしましょうか、リーリエ」

「……」

「…じゃあ、今日はお出かけをしましょうか」

リーリエの手を取って一緒に立ち上がった。

今日もあまり反応はない。たまに反応するとしても首を傾げたり、物を触るだけだ。

ただ、昔から大切に使っていたピッピ人形には反応した。ピッピ人形を見ると嬉しそうに笑うのだ。…今では手放す事無く持っている。

「…ルザミーネ代表、おはようございます」

「ええ、おはようビッケ……」
　ビッケに挨拶をする。どうやら軽い検査をしていたらしい。
「…何かリーリエに変化は？」
「…いいえ、変わらず無反応、です。リーリエ様の思い出の品をひとつひとつ見せてはいるのですが…」
「…わかったわ。ありがとう」
　進展はない、か。…覚悟はしていたけれど、もしかしたら……
「…本日もリーリエ様の事、お願いします。…いち早く回復なされることを」
　深く頭を下げてビッケはそう言った。
「…ごめんなさい、貴方とザオボーに代表を押し付けてしまって」
「…いえ、いいんですよ。代表はリーリエ様の事を優先して下さい。…実はザオボーったらノリノリなんですよ。『夢にまでみた代表だー!!』って」
「ふふっ、ザオボーも結構お茶目な所があるのね」
　あぁ…ごめんなさいビッケ、わたくしなんかに気を遣わせて。
　実は今、ビッケとザオボーに代表代理を勤めてもらっている。ちゃんとエーテルパラダイスをまわせているというようだ。
　最初は代理にさせるつもりは無かった。

…ビッケに言われたのだ。『今はリーリエ様の事を第一に考える時です。私が代表の代わりを勤めますから、代表はどうかリーリエ様のお隣に』…あの一言のお陰でわたくしはリーリエの傍にずっと居ることが出来る。

ザオボーはビッケその話を聞いて、自ら立候補したようだ。

でも、わたくし…いえ、リーリエの影響かエーテルパラダイス全体の活気が衰えている。職員の元気がないように感じる。

どれだけリーリエが皆から好かれていたのかが痛感した。

あぁ、どうすればよかったのでしょうか。

リーリエを殺すか、それとも無理やり生かすか。極限の2択。

わたくしが選んだ無理やり生かすという方法。それで合っていたのかわからなくなる。

…モーンを失ったわたくしには、リーリエしか……

記憶消去に関しては成功したはずだ。

断定ができない理由としては、何かの拍子で思い出すかもしれないからだ。…その可能性があるから、極力リーリエにはあの出来事に関連するものは見せてはいけない。

思い出してしまったら、もう記憶消去の手段は使えない。
記憶消去は身体に負担が物凄くかかる。今リーリエの反応が鈍い理由としてはそれが一つの理由だろう。
それを二度使ってしまうと、きっとリーリエは廃人になる。
だからミヅキに会わせるわけにはいかない。
「……」
リーリエを見る。ゆっくり、ゆっくりとわたくしの手を握って歩いている。見つめる先は虚空かピッピ人形。
わたくしを見ることはない。
この先のリハビリで、リーリエの記憶にわたくし達が存在しているという保証はない。
「……っ」
リーリエを抱き締める。何をされたかわからない様子でわたくしを見つめる。その目には何も写ってはいなかった。

きょうもまた、だれかがくる。
そのひとはわたしにいろいろしてくれるひと。
きょうはおでかけ?をする。
そのひとにてをひかれてあるく。
そのひとはいつも、ほんをよんでくれたり、えをかいてくれたりする。
ごはんもたべさせてくれる。
…でも、だれだかわからない。
…なにも、わからない。
…こわい。
ほんも、えも、ごはんも。
そのひとが、おしえてくれたからわかるだけ。
だから、なにもわからない。
…なにもわからないけど、ひとつだけしってるものがある。
おにんぎょう。

ふしぎなかたちで、だっこするとあったかい。
こころがぽかぽかする。
…わたしには、それしかない。
ほかにも、なにかあったようなきがする。
なにか、たいせつなもの。
わからない。
なにもない。
なにも。

「ごめんねぇ…リーリエ……ごめんねぇ…」

わたしはひとりだ。